

京都タワー

京都市下京区

1964年に完成した京都タワーの塔身部分は、鉄骨を一切使わず、卵のように殻だけでその形状を支え、維持する「モノコック構造」だ。殻は、一枚の厚さが12~22mm、高さ2.7mの円筒状の特殊鋼板をていねいにつなぎ合わせている。「応力外皮構造」とも言われ、自動車や飛行機などで使われていたが、大規模な塔状建築物では初。耐震性に極めて優れ、設計安全率は一般建築物の2倍以上で、阪神・淡路大震災や激しい台風も乗り越えてきた。構造アイデアは京都大学の棚橋諒名誉教授によるものだ。

京都駅前の京都中央郵便局の移転が決まり、この跡地に産業、文化、観光の一大センターをとという財界挙げての思いが結集され、1962年から本格的に京都タワーの構想がスタートした。デザインを任されたのが通信建築や日本武道館、聖橋などで知られる山田守氏。曲面、曲線を用いた印象的なデザインで知られるモダニズム建築の巨匠だ。

1964年のタワー建設時には、東寺の塔より高いものは建てないという暗黙のルールがあったことから、文化人やマスコミなどを巻き込んだ景観論争が起こった。建築評論家の長谷川堯氏は著書『建築有情』（1977年・中公新書）で京都タワーについてこう記している。「山田さんは、とにかく建築の外形ということに関しては誰よりも本気であった」。そして時を経て京都人の心に入り込んでいくと。大規模な塔状モノコック構造は初ということもあり難工事だったが、作業は順調に進み、同年12月末に開業した。

ロウソクにも例えられるなめらかな曲面の真っ白い塔は、住宅の瓦屋根を波に見立てた灯台がモチーフである。半世紀以上にわたり人々の暮らしを見守り続けている。



地下3階地上9階のビルの上に高さ100mのタワーが載るというユニークな構造を持つ。全体の高さは131m。タワー部分は、鋼板によるモノコック構造を採用することで高強度を確保すると同時に軽量化(800t)も実現した。地上100mの展望室からは、京都三山に囲まれた京都市街地が360度見渡せる。写真は塔身内部から見たモノコック構造の断面。

